

# 聖々丘

第42号  
2020・6・14 発行  
金光教教学研究

## 先人の伝えに浮かぶ教祖広前の風景

第二部部长 高橋 昌之



紀要『金光教学』は  
本所設立の四年後に一  
号が誕生し、予定では  
今秋に六〇号の刊行を  
迎えます。同誌には論

文や研究ノート等の研究成果ばかりでなく、大  
谷村の庄屋文書である「小野家文書」をはじめ  
各種の資料も掲載されてきました。

その一つである「金光大神事蹟集」(二四〇三  
一号に掲載。以下「事蹟集」)には、教祖様や参  
拝者の様子、広前やその周辺の出来事などが千  
項目ほど収められています。

元資料は、明治期に直信から聴取した記録、  
教祖伝記奉修所(研究所の前身)の調査内容等、  
長年にわたり教団で収集されたものです。それ  
ら資料検討を経た後、「理解」(言葉)は『金光  
教教典』(『教典』)に収録されましたが、そこに

載らなかった事蹟にも紀要を通じて触れること  
ができませんでした。

例えば参拝者が教祖様に出会った時の印象も  
色々と伝わっています。まず容姿については恰  
幅が良かったようです。秋山甲は「:背は今の  
金光様(金光攝胤)位。よく肥えて居られ、風  
呂から上がりたてのように血色がよくあられ」  
たと語っています。私は三代金光様にも直接お  
目にかかったことはありませんが、ふくよかで  
包容力のありそうな方が端座する様を想像しま  
す。大本藤雄も、肌の色が白くふつくらとした  
顔つきの教祖様を、当時の三代金光様と対比し  
ながら回想しています。

また教祖様の様子について、内面にまでおよ  
ぶ印象を伝える人もいます。岡田キクは尾道の  
人で、病身であったことから明治一六年旧正月  
二日に初参拝しました。先行きを悲観する彼女  
に、教祖様は「人の命は人間の考えでは分から  
ない。神は向こうあけ放しであるから、信心し  
て神徳を積んで、長生きするがよい」と教えた  
と、『教典』にあります。そこから彼女はおかげ  
を受けて長生きし、晩年まで取次に従ったとき  
れます。

その岡田が語る教祖様への印象を「事蹟集」に  
窺うと、「教祖は眉長く肉付よく、温情溢るる方  
であったが、同時に頗る鋭い感じをうけた。人  
間として、こういう方がおられるかと思つた:」

と記されています。同様の印象は初代白神新一  
郎や秋山甲も語っています。難儀な氏子をどこ  
までも受け入れる懐の深さと同時に、情に流さ  
れず難儀の正体を凝視する取次という場の緊張  
感が、教祖様をこのように現象させたのでしよ  
うか。直信らによるこうした伝承は、「理解」の  
味わい方に奥行きを与えるように思います。

次にもう一つ「事蹟集」から、教祖広前の様  
子を彷彿とさせる伝えを紹介します。明治一二  
年、西日本一帯でコレラが大流行しました。教  
祖様の御祈念帳にも「ころり(コレラ)」の祈願  
や平癒の札などが見られます(佐藤道文「金光  
大神広前の様相をめぐる一考察」紀要四九号)。  
以下はその当時、教祖様のもとに参拝した吉田  
芳助の伝えです。

明治十二年の頃、虎列刺(コレラ)の始り  
の時、恐ろしくて一步も他出することを得  
ず。張り紙を見ると身がすくんで了う程な  
りしを教祖様に申し上げたるに、「はやり病に  
恐れて居つてどうなるうにい。」とて笑い居  
られ、暫く御理解ありて御広前の左右の御  
幣の内、右手のを抜きて、下されたり。有  
難くて、気分すうつしたり。: :

(「事蹟集」九四六)  
吉田が住む尾道近辺でもコレラが蔓延していた  
のでしよう。行き場のない恐怖心を打ち明けた  
彼に、教祖様は「はやり病」に恐れる必要はな

いと告げ、神の依代よしろである幣を下げました。そのことで、恐怖に囚われていた彼の心に変化が萌した瞬間が振り返られています。

当時ご神前には、願いや御礼の気持ちから人々が供えた鏡や千匹猿、絵馬などが所狭しと並んでいたようです。教祖様が、日々持ち込まれる願いや世の中の事を祈り通された様子は、他の人による伝承や本人の書き物などにも窺われま  
す。吉田の場合、この時に聞いた「理解」の内容は伝わっていません。しかし右のような事蹟を通じて、彼が教祖様の祈りに触れて安心を得た意味へと思いを巡らせることは、今あらためて大切になっていると感じます。

これまで紀要で発表してきた研究成果はこのような資料に支えられ、また同時にいま現在も、研究を通じて様々な資料が収集、編纂、公開されています。長い目で見て必要となる信心の課題に向けて、今後とも全所的な取り組みを進めたいと願っています。  
(岡山・岡山教会)

## ◆令和二年度の計画◆

本年度は研究生の採用が無く、所長以下総勢一五名でのスタートとなりました。新型コロナ



原典ゼミでの「金乃神様金子御さしむけ覚帳」解説文検討の様子

ウィルスの感染拡大に伴う対応として、当初予定していた行事の延期や変更なども生じておりますが、これまでの取り組みの再検討を行い、教学研究としての新たな展開へ向けて、より一層、着実な取り組みを進めてまいりたいと思えます。

今後の実施に向けて、おかげを蒙ることができましますよう、願いを立ててまいりたいと存じます。  
なお、現時点での予定は以下の通りとなりますが、状況によって変更となる場合もあります。

### 紀要論文講読セミナー

【場所】金光北ウイング光風館研修室  
【日時】未定(各日一三・〇〇〜一五・〇〇の予定)

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、初めて論文に触れられる方

も意識した取り組みです。本年は、本部月例祭の通常執行再開にあわせての開講を願っております。

開講日・内容など今後の情報については、教報・金光新聞の他、教学研究所ホームページや金光教本部フェイスブックなどを通じて随時告知していく予定です。

### 第五九回教学研究会

【場所】金光北ウイングやつなみホール  
【日時】未定(延期)

近年、六月に開催してきました教学研究会は、現時点として、秋頃の開催を目指して企画中です。

### 第一四回教学に関する交流集会

【場所】金光北ウイングやつなみホール  
【日時】十一月五日(日)午後(予定)

信奉者との討議や意見交換を通じた、相互の問題関心の醸成を願うための取り組みです。

本年度は、教祖の事蹟に関する知見の紹介と懇談を中心に企画中です。

### 第二一回教学講演会

【場所】本部広前会堂西二階  
【日時】十二月三日(日)午前(予定)

布教功労者報徳祭当日の午前に、紀要六〇号の研究成果を題材にした教学講演会を開催する

予定です。

○

この他、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図ってまいります。

さらに本年は、「金乃神様金子御さしむけ覚帳」(旧称「金光大神直筆帳面1」)の紀要掲載を予定しており、現在、原典ゼミを中心に解説文の検討作業を進めております。

なお、例年、広く現代の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図るべく、他宗・教団・宗派との研究交流(教団付置研究所懇話会)や、一般諸学問との交流を行っています。今年度は、状況を鑑みつつ可能なかぎり進めてまいります。

これら取り組みを通じて、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培ってまいりたいと存じます。

◇令和二年度研究題目◇

〈第一部教祖研究〉

・神勤を見返させる明治四年

―神職に関する記録に注目して―

所頁 岩崎繁之

・明治期における金神

―「金光大神暦注略年譜」の様相を手がかりに―

所頁 白石淳平

〈第二部教義研究〉

・「めぐり」の位相とその意味

―本教における人間観、救済観への問い―

所頁 高橋昌之

〈第三部教団史研究〉

・「昭和一九年教規」施行後に浮かぶ「教会布教」とその背景

―「教会機能の拡充強化」をめぐる議論に注目して―

所頁 兎山真生

・明治・大正期における諸団体の結成及び活動実態の諸相

所頁 山田光徳

・明治二〇年代の岡山市域における布教の諸相

―新市教会資料「祈念簿」を手がかりに―

所頁 須崎真治

・昭和初期の一修行生の関心をめぐって

―松鷹長一の西賀茂小教会所修行時代のノートを中心に―

所頁 森川育子

お知らせ

◇宿直の廃止について◇

本年一月より宿直を廃止しました。

なお、休務日の日直は引き続き行います。

また、夜間の防犯対策として正門扉の改修が

実施されました。

ご案内

◇紀要バックナンバーの提供について◇

紀要の更なる活用への願いから、本所所蔵紀要のバックナンバー(第四九号以前)について、ご希望の方には提供いたしますので、九月末を目途に、お申し出下さい。

お申し出の際には、電話かFAX、またはEメールにて、希望される紀要の号数と冊数をお知らせください。

ただし、古い号につきましては、ご希望に添えない場合がございます。予め、ご了承下さい。

なお、提供の具体的方法や時期等の詳細につきましては、お申し出いただいた後、ご相談させていただきます。

▼金光教教学研究所Eメールアドレス

kyogaku@mx1.kev.ne.jp

※電話・FAX番号は本誌巻末掲載



正門扉改修工事(12月)

★提

研究員

服部貴子

★言

## 「人が育つ」組織



少し前のことですが、ある席で「教団が死ぬって、どんなことだと思いますか？」という質問を耳にしました。

質問の具体的な背景はわからなかったのですが、穏やかでない言葉にドキッとして、自分でも考えてみました。そのとき頭に浮かんだのが、「人を育てなければ組織は死ぬ」という言葉です。教学研究所に奉職する前に一般企業に勤めていた時、上司が口にしていました。

新しい人材が育たないと、メンバーの高齢化とともに組織は無くなってしまふ…、もちろんそうなのですが、それだけの意味ではないようです。どんなに人材に恵まれ、充実した活動をおこなっている組織でも、人を育てるはたらくが同時になされていなければ、組織として力を発揮し続けることはできない、ということだと思います。

この「人を育てる」ということでいうと、研

究所でそこにかけられているエネルギーは大きなものがあると感じます。なかでも特徴的なのは、その過程でその人と向き合っていくことに時間をかける点です。私が過ごした約二年半では、カリキュラム以外のところで共に過ごしたり、研究とは直接関わりのない議論をしたり、そういうことに多くの時間がかけられています。教学研究という枠組みの中で研究する意味や、振る舞いを学んでいく時間なのかもしれません。

こうしたあり方は、それまで企業で経験した育成とは対照的でした。そこでは、時間や労力（精神的な面も含めて）の負担は、コストとして捉えられ、いかに省くかということが重視されてきました。例えば、議論する時は、仕事と人格を切り離して考える、それは精神的な面でのコストを省くということです。また「見て学ぶ」いわゆる「徒弟制」的なあり方ではなく、それを論理化することで効率化がはかられていました。

そういう意味では、時間をかけてじっくりと向き合っていく研究所のあり方は、「育てる側」「育てられる側」双方にとってコストの大きいものといえます。収益を目的とする場と違って、研究の素養などは、そうしたコストをかけることで培われていく面もあるでしょう。が、一方で、研究所として求められる成果と両立しながら、

育成にも力を割いていくことは、簡単なことではないと思います。

けれども、前述の上司の言葉に戻ると、いかに現状の成果を守ろうとも、人を育てることにかけるコストを省いては組織としては生き続けられないということになります。逆に言うと、人を育てることは、組織の将来をつくっていくことでもあります。研究所では、育成に関わる動きの中から新しい研究につながっていくような例もあると思います。先ほど、「育てる側」「育てられる側」と書きましたが、実際には、育成への取組みを通して組織全体が「育つ」はたらくきになっていくという側面があり、それ自体が新しいことを生み出す力にもつながっていくのではないのでしょうか。

今、新型ウイルスの影響で、人と人とのつながりが変化しています。例えば対面する替わりとしての通信手段の活用が進む一方で、逆に人と過ごすことの意味は深まっているようです。事態が収束した後も、元の社会に戻るのではなく、きっと新しいつながり方は展開していくことになるでしょう。その影響は私達のところにも届き、組織のあり方も変わっていくのではと感じています。そうした変化を取り入れつつ、「人が育つ」組織として、研究所のはたらきがこれからも柔軟になされていくことを願っています。

(愛知・牧野教会)

## 令和元年度研究報告

### 検討会に参加して

#### 令和元年度研究報告

#### 検討会をふり返って

第三部所員 山田光徳



令和元年度は、新助手一名を加えて計一〇本の研究報告が提出され、約二週間に亘り検討会が行われた。ここ

では、主に三つの研究報告について、検討会での話題を交えながら紹介し、この度の研究報告検討会をふり返ってみたい。

さて、立教一六〇年という節年を迎え、『金光大神事蹟に関する研究資料』も刊行され、とくに教祖研究では、これまで培われてきた研究成果の再検討や、新たな研究領域の開拓が目指されている。そうした取り組みの一つとして、岩崎繁之報告「肥灰差し止めの出来事見返し」の諸相―「金光大神年譜帳」執筆との関係から―を紹介しよう。

同報告は、金光大神が、安政六年一〇月二日の条（「立教神伝」）を明治四年時点から度々見返した意味を問うことを目的とする。そしてその問いに向かうべく、『金光大神事蹟に関する研究資料』所収のものや新たに収集された神職在任時の諸資料によって、家族や世話方、村や藩といった金光大神の周囲の人々の動きを交えて当該期の動向を捉えていくことが可能になったことから、広前の運営という視点を導入し、

当該期の動向把握が試みられた。その中で、明治四年一二月という、広前のあり方が問われる時期に起筆された「金光大神年譜帳」（以下、「年譜帳」）の執筆過程へも言及し、同帳と、その前段階と目される記録（「金光大神手控え綴」所収）との対照、分析が行われた。そこでは、「年譜帳」に記載される事柄を金光大神が推敲して書き直し、差し替えていた可能性が指摘されていた。

こうした指摘から検討会では、金光大神のそのような営みをどう捉えるのかということに関わって、金光大神の「不安」ということが話題となった。筆者の意図は広前の有り様を組織論的に究明することにあるが、そうした「不安」の指摘は、神との関わりを生きる中で、「あれは何だったのか」と何度も確かめようとする金光大神の姿が浮かぶとの指摘であると思え、金光大神を一人の人間としてより身近に感じられるような気がした。また、そうした感覚を抱きつ

つ、広前の運営の様相を主軸とした議論がなされていることを改めて意識することで、紆余曲折がありつつも神と関わり成長していく直線的な金光大神の信心の物語を相対化させられるような思いになり、興味深かった。

ところで、広前に関わる人間関係への再注目という点では、堀江道広報告「金乃神様金子御さしむけ覚帳について」も重要な役割を担うことになると思う。

同報告は、主に立教以降明治以前の内容が記載された「金乃神様金子御さしむけ覚帳」（旧称「金光大神直筆帳面1」）の性格究明を目的としたものである。同帳面は、先行研究（紀要第五七号大林論文）で、参拝者への金銭融通など金銭に関わるものであることは言及されている。それを踏まえて堀江報告では、帳面の成り立ちの把握や、記述内容全体の解説、提示等に取り組まれた。読み下し文も添付資料として示され、検討会では、その内容から様々なことが話し合われた。

その中の一つに、同帳中、慶応二年九月一〇日の条がある。それは、広前を訪れた三人の修験者に対し、「茶漬け」をふるまったと記したものである。これをめぐって、「茶漬け」を出したのは妻とせか、あるいは息子らか。そもそもなぜ「茶漬け」を出すのか。これは何を意味するものなのかと話題になった。些細なことといえ

ばそうなのだが、私には、金光大神家族らの広前への関わりがあり方や、従属的な関係を想起しがちな修験者と金光大神らの関わりを問い直される気がした。今後、このような資料から様々に調査が進められていくであろう。広前の実態の様相をめぐって、如何なる新たな気づきをもたらしことになるのかと楽しみになる検討会だった。その意味で、解読等、資料に沈潜する研究者の地道な取り組みの重要性を改めて考えさせられる。

このように、資料と対話した研究者の報告を通じて、新たな研究の展開へと結び付く過程に触れることができるのも検討会のおもしろさの一つだと思う。

それは教団史研究の分野でも感じられたことである。たとえば、**児山真生報告「教会における戦災・復興の経験とその意味」**は、第二次世界大戦において戦災にあった教会の復興をめぐる教師、信奉者の経験の意味を問うたものである。この研究の契機となったのも、各教会の戦災被害状況などを教務が調査し纏めた「戦災教会実情調査」などの資料との出会いである。資料から汲み取ったものをデータ入力し、教会個々の状況を明らかにしていくことで、復興に関わった当事者たちの年齢や家族構成、教会の立地や環境といった要件が、教師、信奉者ら個々の心性を含めた敗戦後間もない教会の特異な状況と

して逆に浮かび上がる。従来の統計的類型的把握とは別個の、いわば復興の歴史実態とは何かに迫るものといえるだろう。検討会では、従来の教史的関心から描かれてきた当該期の教団動向を踏まえ、戦後教団の立ち上げをめぐる全体的様相へ、それらをどう位置付けていくかについて、意見が交わされることとなった。

以上、見てきた三報告だけでなく、その他の取り組みにも共通して、解読やデータ入力といった研究の基礎的作業の重要性が浮かんできた。これは「当たり前」のこととはいえ、そうした「当たり前」が「当たり前」になされることの大切さを改めて思わせられる。そして、そうした個々の取り組み、検討会において共同的に深まり、鍛えられていくという働き合いを通じて、今後より一層研究内容の充実を図っていきたい。

(岡山・新見教会)

## 検討会を通して学んだこと

第二部助手 橋本雄二



初めての研究報告執筆で感じたのは、自分の用意した言葉で自分が困り込まれていく怖さだった。しかし、自

分の取り組みをそのまま見てもらうためには、やはり言葉にしていかねばと思い直して筆を進め、今として、やりきったという思いで提出した。そして迎えた検討会では、予想外の質問をされ、受け答えに詰まることもあったが、自分の書いた文章にたくさん新しい視点を与えてもらえるのは、ありがたく嬉しいことだと分かった。

その後の検討会の期間は、先生達の報告を読むだけでも精一杯で、まるでマラソンを毎日走っているような気分だった。そこで見させられる知らない景色の中で、思考をめぐらせるのは大変だったが、面白くて、ぞくぞくもし、きついとは思わなかった。さらに他の先生の質問を聞く中で、自分の認識や理解の仕方に気づき与えられ、違う景色が広がり、一日を終える度に走りきった後のような爽快感があった。そこで思わされたのは、研究は一人だけで作り上げるものではないのだということだった。検討する側も問いを丁寧に育てていかねばならず、その難しさと大切さを学ばされた。検討会という場の重要さを少し知ることが出来、ここで学んだことを忘れずに、日頃から言葉にしておくことを深めていくことに積極的でありたいと思う。

(京都・伏見教会)

# 『金光大神事蹟に関する研究資料』から浮かぶ研究動向

## 時代転換期の教学課題

嘱託 渡辺順一



何故、今になって、教祖直筆や金光四神の筆写資料という教団の根本テキストが、我々に送り届けられてきているのか？金光教という宗教は、こんにちなお、「原始金光教」の段階での教団形成と基礎資料の蒐集・註解作業を課題化させられている、ということなのか？新資料群を前に、このような問いが、沸々と噴き出してきた。

思えば、「覚帳」の登場は、未知であった金光大神の信仰内容が、こんにちの信仰営為の足場を揺るがすような言語事件として、金光教信奉者の前に立ち現れていた筈だった。しかし、そのテキストに記された様々な「お知らせ」の言葉の、隠喩的な挑発性・暴力性、あるいは不可解性は、やがて教団の既存の信仰世界の内側に囲い込まれ、制度的に飼い慣らされていったものではあるまいか。新資料群は、「覚書」「覚帳」「御理解集」など『金光教教典』に集録された諸テキスト全体の

読み直しを、時代社会の大きな転換期にある今、改めて我々に要請しているように思えてならない。

以下、今として新資料群から考えさせられたことを、幾つか列挙してみたい。

1、『金光大神年譜帳』には、維新期の社会的混沌や自然災害の状況が繰り返し描かれており、金光大神が、それらの状況と向き合い、揺れ動きながら、神との関係を深めていたことが窺える。近世社会が崩壊した維新时期は、「恐怖」が人々を支配した時代でもあった。「感染列島」の様相を帯びた様々な疫病の蔓延、日照り・地震・台風などによる災禍、仁政イデオロギーが崩壊した「万人の戦争状態」の中での民衆による「水平方向の暴力」の噴出。このような、天地と人間社会が共に荒れ狂い、人々が見えない死の諸力（ケガレ）に怯える時代状況を、金光大神はどのように見据え、総氏子の何を折りつつ、「覚書」で自らの生の歩みと信仰の来歴を辿っていたのだろうか。

2、改暦によって存在を消された金神・大將軍など陰陽道の神々は、厝注なき新暦の時代に、その神性をどう息づかせていたのだろうか。『金光大神曆注略年譜』では、陰陽五行による季節運行、年月日時に配当されて世界に偏在する無数の金神の所在などが記されつつ、金光大神夫婦と子女達の出生年月日時、疫病罹患の歳などが記載されている。また大將軍は、明治期になって始めて「覚書」「覚帳」に姿を現す。それら曆神達は、天地金乃神の信仰世界の中で、陰陽五行の思想的枠組みを碎破されることによって逆に生き生きと蘇

り、地上の時と場所を守る神としての普遍的神性を表明し得たのではなかったか。

3、金光教の「立教」は「覚書」安政六年十月の専念布教開始の事蹟に求められている。しかし、その事蹟は、世帯を子息に委譲したことで家業離脱が可能となった、隠居身分での布教開始を伝えるものである。「結界恪勤」というカタチに教団の独自性を発見した教義的立場からの、「覚書」物語の切り取りによる、事蹟の制度化であった。

戦後教団はその制度化された事蹟・教祖像を中核に再統合されていったのであるが、こんにち改めて、「金光教」の始まりの時はいつなのか、諸テキストの検討を通じて議論してもよいのかも知れない。天地金乃神（金神）の「御陰を知り」（「年譜帳」「曆注略年譜」ということからすると、「覚帳」表紙にも掲載された、安政四年十月の龜山広前での金神との出会いである。また「生神」の自立ということであれば、翌五年十二月の文治大明神誕生である。さらに「天地金乃神」「生神金光大神」の神性開示ということなら、「神前撤去」を経た明治六年八月の神伝を、ポスト戦後教団の「立教神伝」と位置づけることも可能である。

4、金光四神による諸テキスト筆写は、テキスト読解の教学的営みと捉えられるが、その解釈実践を通じて得られた、金光大神の信仰の金光四神による発見的継承の中身については、「御理解集」に集録されている金光大神理解伝承資料群の再検討による、両者の言行資料の腑分けをしていかな

いと、追究できないのではないかと考える。

(大阪・羽曳野教会)

# 彙報

(令和元年六月一日  
〜令和二年五月三十一日)

## ▲ 人事関係 ▼

### 一、職員

○教師橋本雄二、一〇月一日付で助手に任命。  
○教師金子信栄、一〇月二日付で臨時御用奉仕に採用。○臨時御用奉仕末永信野、一〇月三十一日付で辞任。○部長児山真生、三月三十一日付で任期満了。翌四月一日付で再任(第三部長に指名)。○助手森川育子、四月一日付で所員に任命。  
○資料室長中西教幸、四月三〇日付で指名を解かれ、五月一日付で学院へ異動。○主事毛利義幸、五月一日付で資料室長に指名。○臨時御用奉仕金子信栄、五月一日付で資料室に配属。

### 二、研究生

○研究生金子信栄、同橋本雄二、九月三〇日付で委嘱期間満了。

### 三、嘱託

○嘱託渡辺順一、六月三〇日付で委嘱期間満了、翌七月一日付で再度委嘱。

### 四、研究員

○研究員松岡光一、九月三〇日付で委嘱期間満了、

翌一〇月一日付で再度委嘱。○研究員宮下寿美、九月三〇日付で委嘱期間満了。○教師向井道江、一〇月一日付で研究員を委嘱。○研究員西村明正、同服部貴子、一月一九日付で委嘱期間満了、翌二月二〇日付で再度委嘱。

### 五、評議員

○評議員松澤光明、二月一九日付で任期満了(三期一二年)。○教師水野照雄、二月二〇日付で評議員に任命。

※五月三十一日現在

所長一名、部長三名、幹事一名、所員三名、助手三名、事務長一名、主事二名、臨時御用奉仕一名(計一五名)、嘱託七名、研究員八名、評議員五名。

## ☆ おめでた ☆

### 結婚

○助手堀江道広は、三月一五日、松田久子さん(岡山・美伯)と結婚。



# SAKAMICHI

今号も無事発行することができました。執筆の  
お願いを快くご承引頂き、寄稿して下さった皆様  
に御礼を申し上げます。

さて、新型コロナウイルス禍の最中であって、  
本年も常の年と変わらずに新緑が芽吹き、巡り来  
る天地の雄大な営みにハッとさせられ、またホッ  
とするひとときがあります。大いなる神様のお働  
きをいただき、この状況も速やかに収束の時を迎  
えることができるよう願わずにいられません。

当たり前の日常生活が軋み、世界がこれまでと  
はまるで違って見えています。慣れ親しんだ日常  
というものが、実は儂く脆く、一面危うさの上に  
紡がれてきたことに、今更ながら驚かされます。

今回の事態を契機として、この世界ではいま、  
グローバルズムをはじめ、これまで当たり前とさ  
れてきた集団と個との関係性などが、否応もなく  
問いに付されようとしているのではないかと、思い  
ます。

幕末から明治の混乱の世相を生きた金光大神も  
また、日常生活の軋みとともに、こうした問いか  
けを身に受け、人としての確かな歩みを提示され  
たと言えるのではないのでしょうか。刻々に得られ  
る情報や知識だけではなく、歴史の叡知に立ち  
返って、もう一度問題を考え直してみる必要があ  
ると感じています。<sup>(2)</sup>

発行・印刷 金光教学研究 研究所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話 (〇八六五)

四二一三一一七

FAX (〇八六五)

四二一三一一九

<http://www.konkokyo.or.jp/kyogaku/index.html>